

合抱の木も毫末より生じ、九層の台も垠土より起こり、千里の行も足下より始む。為す者はこれを敗り、執る者は之を失う。是を以て聖人は、為すこと無し、故に敗るること無し。執ること無し、故に失うこと無し。民の事に従うは、常に幾んど成るに於いて之を敗る。終わりを慎むこと初めの如くなれば、則ち事を敗ること無し。是を以て聖人は、欲せざるを欲して、得難きの貨を貴ばず、学ばざるを学びとして、衆人の過ぎたる所を復し、以て万物の自然を輔け、而して敢えて為さず。

【大体の意味内容】その幹を両腕で抱えるほどの大木も、毛先ほどの小さな芽から生まれ、

九層にも積み重ねた築山も、一杯の土の積み重ねから起こり、千里の道も足元の一步から

踏み出される。効率的に事業を営もうとする者ほど、かえってそれをぶち壊しにするし、

成果や利益に執着するものは、それを失うものだ。聖人は、ことさらなことを為そうと

はせず、故にぶち壊しにすることは無い。物事に執着することがない、故に失うことも

ない。人民が、とあるプロジェクトに従事する際は、いつも完成間際になって、それを台無

しにしてしまう。最後の仕上げを、開始した時と同じように慎重に、時間のかかることを

覚悟のうえで進めれば、失敗することも無い。したがって聖人は何も欲しない、無欲であ

る生き方を欲して、希少価値の高い宝を有難がったりはしない。これは成功するための

方法を学ぶことではない。人間の行為として学習するということがなくし、道の徳きに

生かされている真実を「学び」として、人間中心な生活態度を本来の在り方に復すべき

なのだ。万物に備わる「自然の力」つまり「自ずからあるべき姿へ」と成り上がってゆく働きを輔ければよく、殊更に何かを為そうなどとはしない方がよい。

「無為自然」を「むいしぜん」と読むのは本当の本当は間違いなのです。本来は「ぶいじねん」と読む言葉でした。

人間の浅知恵で余計なことを、かえって有害なことをするのではなく、すべてのものは、そのものごとくの本来的な姿や、成るべき相へと進む力が備わっている。「自ずから然ることなる（おのずより、あつめぬ）」という意味で「自然」と呼んでいました。いわば生命あるものの限りません。地球の自転や太陽光や熱の影響で空気の流れや水の循環が起る、風や雨によって山や岩石がゆくと削られ様々に変貌したのだった。その物たちが備わった「自然」なのです。たまたまその場に存在したのと同じ現象に触れたのと同じでも、そのものごとく宿命的な「自然」にほかならなかつた。

明治になって西洋の様々な文化文明が入ってきて、日本語に訳せないので言葉もたくさん紹介されたので、漢字の組み合わせで「新しい日本語」が強引に作られるようになりました。「ネイチャー(nature)」もその内の一つ、もともとある和語では訳せませんでした。「世界の中で人間から独立して存在する物、大地、岩石、天候、植物、そして動物」といった説明がされる言葉で、生き物や無生物などすべてを包括する言葉です。しかも人間とは切り離して考える物だから、ほんんと苦い紛れに「自然」という語を借していい、「自然」と読めるようになったのではなかつたかと思われまふ。

「自然」という語を借していい、「自然」と読めるようになったのではなかつたかと思われまふ。ゆえに「nature」の見方考え方は、私たちがいうのは違和感ありますね。人間だって「自然」の一部として、「自然」が備わっているわ。

「無為自然」は、決して「怠けいろう」という意味ではなかつ、また科学技術や文明と対立するものでもなかつ、むしろ「nature」と対峙するものなのではなかつたかと思われました。万物の自然を捻じ曲げるような営みをせず、私たち自身も含めた自然を輔け、その力によって生かされるように、努力するにすぎはなかつたか。今、私たちが自然が働いているか「感覚を磨いて冷静に受け止め、それに従って全力で生命燃焼することが大事なのではないでしょうか。